

2年めの春

県立深沢高等学校
校長 田中 和也

深沢高校のホームページをご覧くださいまして、誠にありがとうございます。
深沢高校に着任してあっという間に四季がひと巡りしてしまいました。

昨年はコロナ感染症対策を講じつつ、通常の教育活動とともに様々な行事を従来に近い形で実施することができました。前年度から4月に延期されていた修学旅行をはじめ、5月の体育祭、9月の深高祭（文化祭）と2年生の修学旅行、12月の球技大会、3月の合唱祭など内容や来場者に制約は設けましたが、生徒と教員の工夫によってそれぞれ素晴らしい形で展開されました。

2年もしくは3年の空白があって、蓄積された記憶や経験が失われた状況でありながらも、1つの目標に向かって生徒と教員が知恵を出し合い進んでいく、その中にこそ尊い時間の共有と絆の深まりがあり、これまでにない新しい形となって我々を感動させてくれました。

深高生には素朴なかわいさがあります。授業への取り組みや集会時における聴く姿勢など、大変落ち着いており、おとなしいという印象を受けます。しかし、例えば体育祭での競技やグループアトラクション（創作ダンス）、文化祭でのクラスイベントや部活動発表などでは、年齢らしいエネルギッシュな姿を見せてくれます。全体的に手を抜かず真摯に取り組む生徒がほとんどで、メリハリがあるというか、TPOをわきまえて行動できる姿に何度も感心させられました。

この3月に卒業した35期生は、コロナ禍の影響をもっとも大きく受けた学年でした。入学式だけは行われましたがその後2か月に及ぶ休校。分散登校・オンライン授業などの段階を経ながら何とか学校生活に入ったものの3年間を通じて「新しい生活様式」という制約を受け、マスクは顔の一部となり、楽しいはずの食事は黙食を強いられました。卒業式予行で校歌を練習斉唱したとき、「私はこれまで校歌を2回しか聞いてなくて、全然歌えない！」と、それでも笑って語った生徒の声が忘れられません。

昨年10月には県立高校改革実施計画（Ⅲ期）が発表され、深沢高校は再編・統合の対象校となりました。発表直後は衝撃が走りましたし、同窓会や卒業生の皆様から残念に思うお気持ちを伺うこともありました。それでも生徒と教員の熱意のこもった学校説明会が功を奏し、令和5年度の新入生（38期生）を予定の定員数どおりに迎えることができました。

令和5年度は生徒と教員、関係者のいろいろな思いの中で始まっています。これまで受け継がれてきた深沢高校の魅力、アットホームな雰囲気や失うことなく、少しずつ出口が見えてきているコロナ禍に立ち向かいながら、生徒ひとり一人に寄り添い、その成長を支え、見守っていききたいという気持ちは強くなるばかりです。本校の教育活動に対し、温かなご理解とご支援をいただきますよう、どうぞよろしくお願いたします。